

称号及び氏名	博士（経済学）	下山 晃
学位授与の日付	平成17年7月31日	
論文名	「毛皮と皮革の文明史—世界フロンティアと掠奪のシステム—」	
論文審査委員	主査 教授	浅羽良昌
	副査 教授	津戸正廣
	副査 教授	宮田由紀夫

論文要旨

最古の衣料といわれる毛皮・皮革は、いつの時代、どの文明圏においても非常に重要な特異な役割を担ってきたが、その歴史の実体 については不明の点が多く、社会経済史的な本格的な文献も少ない。本書では、原初には死霊復活の呪術や習俗と結びつき、古代には皇帝権力の形成や天皇制の成立と密接に関わり、また中世以降には社会的ステータス・シンボルとして上流層の生活や身分規定と不可分 のものとなった毛皮の交易が、中世及び近代資本主義システムの中で交易圏内の先住民に対する強制的な貢納制度や奴隷制を伴いながらさまざまな社会・生態変容と時代の変転をもたらした史実に論究した。従来の書物では全くふれられていないエピソードも多く拾い 上げながら、毛皮の世界フロンティアの拡がり、極東・日本の開 国・近代化にも直接結びついた点など、今までほとんど研究の及んでいない論点にも本格的な考察を及ぼした。社会経済史的な文献を基本として、考古人類学や民俗学、内外の古典、各種史料など、毛皮・皮革関連の文献・参考資料を広く渉猟し、25 年間の研究成果をまとめあげたのが本書である。序章では本書の課題と研究史の展望を整理し、本書と内外の関連文献を時代ごとの研究史の流れの中に位置づけた。本書が単なる毛皮史の概説書ではなく、分析の中心的な論点を以下の3点に置いたことを明示した。

- (1) 毛皮と原初の心性・民俗文化との関わり（ヒトと霊魂・精霊との関連）
- (2) 毛皮交易と強制貢納制・奴隷制との関わり（ヒトとヒトとの関連）
- (3) 毛皮をめぐるエコ・クライシス（ヒトと自然の関連）

第1章「原初心性と毛皮・皮革」では「死衣を裏返しに着せる」という、世界各地にみられた太古の風習が、毛皮の呪術的機能を反映した一種普遍的な習俗であったことに言及し、「異界・精霊と共に在った世界」における衣料観念の根元的な問い直しを試みた。また、人間の生皮を被ったアステカの神シペ・トテックの信仰やイエス・キリストの復活神話、日本全国に広がるのこる姥皮伝説や胞衣（えな）の風習などが、毛皮を纏うことに関わ

る普遍的な心性の在り方の次元で、広い繋がりをもつことを明らかにした。

第2章「原始・古代」では最古の衣料毛皮がネアンデルタールの時代から毛皮葬（裏向けの死衣）の痕跡をもっていたこと、シュメール起源の毛皮服カウナケスが古代世界の基本モードとして数千年にわたり「流行」した経緯と理由、古代エジプトの狩猟と皮革文化の内容と特徴などについて論じ、古代ギリシア・ローマの毛皮の社会的、文化史的な特質についても論じた。ローマでは「荘厳」を皇帝権力のステイタスの基底としたカエサル時代の社会的な気風と毛皮服の役割を論じ、紫染めの色のシンボリズムを分析した。更に、古代日本や中国において、シカ狩りが天皇・皇帝権力の成立と不可分の関係にあったことを読み解き（「中原に鹿を逐う」）、古来読み継がれてきた古典・史料に毛皮史研究の観点から独自の解釈を与えた。

第3章「中世：動物観の変遷と毛皮猟の進展」で論じたのは、ヨーロッパにおいてのみ長く根付くことになる「征服すべき野蛮」という自然観の変遷と、その変遷から毛皮獣枯渇にまで至る狩猟（森林破壊）の進展の歴史である。具体的には、「狩猟のバイブル」として長く手本書とされたガストン・フェビュスの『狩猟の書』や中世社会で頻繁に発布された奢侈禁止令の紹介・分析などにふれながら、「流行の狂気」と言われた中世上流社会での毛皮・皮革愛好の文化を辿った。ヴァイキング、ロシア商人、ハンザ同盟の活動が、「毛皮の強制的貢納制度」を伴いながら抬頭した状況を、交易のルートや商人の類型にも着目して分析した。毛皮の強制貢納がヨーロッパ＝イスラム商業圏やモンゴル帝国の支配圏、モスクワ商人の活動圏でも広がりを持ったことを例証したのが第4章「ユーラシア毛皮交易圏」である。対象とした地域・時代の政治支配が、いずれも毛皮猟やその貢納制度を主要な基軸としていた点を明らかにし、各時代・地域の相互の歴史的・地域的関連にもふれた。本書執筆の出発点であり最も中心的な内容をもったのが第5章と第6章である。両章とも、世界システムの形成・展開を視野に収めながら、人種奴隷制植民地形成の時代的な情勢の中での毛皮フロンティアの問題を扱っている。第5章「植民期アメリカの毛皮交易」ではヨーロッパ移民とアメリカ先住民の接触の過程でまず最初に最大の影響をもった毛皮交易が、先住民奴隷化を伴いながら広範囲に進展した事情を具体的に辿り、史上最長命で史上最大の領地を保有した株式会社ハドソン湾会社の成立と活動の内容を仔細に論じた。内外いずれの文献でも白人移民と先住民の友好的関係が協調されるカナダの毛皮史（セント・ローレンス商業帝国）に関してはカナダにおけるインディアン奴隷制の存在にふれ、英領十三州植民地の毛皮史についても北部・中部・南部いずれの植民地でも毛皮フロンティアの拡大が先住民の奴隷化や先住民社会の崩壊と密接に結びついていた事実を指摘した。毛皮を利用した製帽工業の飛躍的な発展や毛皮・皮革輸出の驚異的な進展の分析、ヨーロッパ列強相互の対立の中でのイギリス優位（「ストラウド」という特殊な上質毛皮の安価な生産の優位による）の確定の原因の分析、地方交易の分析による従来学説の見直しなども行ない、また毛皮貿易を支配した植民地支配層の「マーチャント・エリート」としての特徴にも論じた。

第6章を「毛皮の世界フロンティア」と題したのは、毛皮交易圏の広がり西に向けてはアメリカのフロンティアの開拓、東に向けてはシベリアの開拓として同時並行的に進展しながら、ヨーロッパを中核市場として相互に密接な関連を内包し、グローバルな広がりや繋がりをもっていたからである。毛皮商人・毛皮会社の具体的な人物像や活動にふれながら、その世界フロンティアの開拓がいずれも、いつの時代どの地域でも、先住民の奴隷化及び先住民社会の徹底した崩壊に結びつき、また広範な地域での毛皮獣の乱獲と枯渇・絶滅に結びついていた事実を論じたのが本書の最大の特色である。本書サブタイトルを「世界フロンティアと掠奪のシステム」としたのは、本章と第5章の内容・主張を重んじてのことである。

第7章と終章で課題としたのは、その「世界フロンティア」が極東に及んで「結び目」を持つに至った経緯を辿り、その影響と帰結とを考察することであった。第7章「極東の開国と毛皮」では、「世界フロンティア」に繋がる3つの経路が中露陸路貿易ルートと、上海・広東などの夷館区・租界での取引ルート、そして日本との交易という三経路であったことを論証し、近代アジアの国際情勢の激変が、通常論じられる時期（アヘン戦争期）よりもずっと以前の時代からそのフロンティアの波及によってもたらされていたことを明らかにした。日本についても、漂流民の対外接触の事情や欧米の新聞記事の分析から、既にアメリカ独立革命の終息期から毛皮市場としての日本が重大な役割を担っていた事実にもふれ、通常言われる捕鯨業や綿業との関連以上に毛皮業が大きな意味をもっていたことを実証的に論じた。

最後に終章では、文明開化以後の風俗の「怪化」や生態系破壊の進展に毛皮が最も大きな影響を与えたことを当時の文芸作品や「ウサギ熱」の流行などから分析し、毛皮によって日本人の生活や心性が大きな変容を遂げたことを明らかにした。

審査結果の要旨

本論文は、人類と毛皮や皮革との歴史を、毛皮・皮革をめぐる原初の心性と民族文化との関わり、身分制・貢納制・奴隷制と毛皮交易展開との関係、さらには毛皮の乱獲・掠奪システムとエコシステムの崩壊〈エコクライシス〉との関連からとらえた研究である。とりわけ 16 世紀以降におけるユーラシア大陸ロシア、新大陸アメリカから、いわば東西ルートを経て日本の近代を含む極東へと辿る毛皮と皮革の世界的交易ルートの確立は、実にグローバルな形で進展した毛皮の世界フロンティアの所産であるとしたところに本論文の最大の意義がある。

本論文は、序章と終章に加え 7 章から構成されている。序章では国内外の先行研究とあわせ本書の課題を指摘した上で、第 1 章では原始・古代の文化に普遍的、人類史に共通した心性と毛皮との問題を提起している。第 2 章では毛皮は初期の段階から人の暮らしに重要な衣料素材であったが、それにとどまらず古代オリエントのライオン崇拝そして日本や中国のシカやトラへの権威シンボルとみなす心性に鑑みれば、毛皮の歴史は、こうした心性の文化を読み解く心的構造の歴史として把握している。第 3 章ではバイキングやロシア商人さらにハンザ諸都市による毛皮の捕獲が中世ヨーロッパに毛皮・皮革産業の発展をもたらす一方、身分規定の厳格化した中世社会では、高価な毛皮の着用はステイタス・シンボルとして高貴な身分にのみ独占されたことを明らかにしている。第 4 章ではイスラム世界とスラブ世界がモンゴル世界に包含される形で史上空前の広大なユーラシア世界を形成したが、このユーラシア世界における貢納制に基づく毛皮取引の解明がなされている。第 5 章では北米アメリカ大陸での毛皮取引の隆盛は、イギリス系移民者が先住民インディアンを奴隷化しながら達成された状況を述べている。

第 6 章では北米とシベリアで同時併行的に進行した毛皮フロンティアの西向きと東向きルートの統合が、日本を含む大平洋北東海域で完結し、ここに世界商品としての毛皮の流通網の形成が可能になったとしている。第 7 章では毛皮の世界フロンティアが日本・極東地域に連結したまさにその時、鎖国下に眠り続けていたこれらの地域の扉が開かれる最初の契機であったとする。したがって綿製品の市場や金や鯨を追い求める動きが日本の鎖国体制を打ち破ったとする従来の見解はグローバルに展開する毛皮フロンティアの長い歴史に照らし合わせれば影が薄いと論じる。ましてペリー来航に先立ちおよそ 1 世紀以前から日本はすでに毛皮フロンティアに包摂されていたと言う指摘は興味深い。終章では毛皮の乱獲がエコクライシスの引き金になったと述べて結びとしている。

本論文は、申請者が大学院時代以来一貫して追求してきたテーマであり、そのいち早い研究着手とあわせ他の追従を許さない膨大な資料の利用により、日本におけるパイオニアとしての成果となっている。しかも申請者が対象とした地域や期間の広がりや長さのもとより、既述した独自の視点からも判明するように、何よりもその構想力の大きさに下山氏の能力の高さが伺える。勿論、16 世紀以前の分析は多少大掴み過ぎる一方、現代における

資本制に基づく毛皮取引の特質を必ずしも明確にするには至っていないが、申請者が最も得意とする 17 世紀以降から 19 世紀におけるアメリカを対象とした分析に関しては特に優れた成果を達成している。こうした試みを評価して、本審査委員会は本論文の審査ならびに学力確認の結果から、博士（経済学）の学位を授与することを適当と認める。